

元気のヒント

◁89▷



菅 俊行

徳島大学病院歯科
(むし歯科)外来医長

「象牙質知覚過敏症」という言葉を一度は耳にされたことはありませんか？

象牙質知覚過敏症は本来、歯の表層にはないはずの象牙質が、むし歯以外の要因で口の中に露出してしまい、冷たい水などに對して「歯がしみる」という症状が一過性に起こる場合に用いられている疾患名です。歯科を受診する患者さんの4人に1人が、何らかの「知覚過敏症状」を訴えているといわれています。

このように多くの方が不快感を訴えている象牙質知覚過敏症は、どのような仕組みで発症しているのでしょうか？

そもそも象牙質は、エナメル質などに覆われて口腔内に露出しておらず、そのような状態では象牙質知覚過敏症が発症することはありません。しかし、歯ぎしりなどの習慣があると、過剰な力力が加わった際にエナメル質と象牙質の境目付近の脆弱な部分の歯質が

象牙質知覚過敏症

欠けて象牙質が露出する場合があります。また、歯周病の進行に伴い、歯茎が下がることにより、歯の根にあたる部分の象牙質が露出することもあります。図1参照。

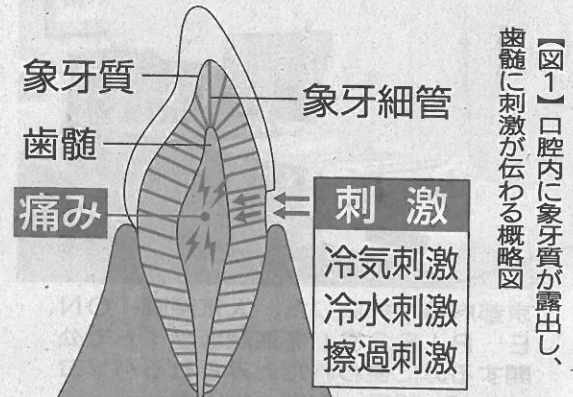
このようにさまざまな要因で露出した象牙質の表面には1平方センチ当たり、2万〜3万の象牙細管と呼ばれる小さな穴があり、これらの象牙細管は歯の神経(歯髄)へと通じています。象牙質表面にある象牙細管の穴が封鎖されている場合は問題ないのですが、多くの穴が開いてしまっていると、外部の刺激がこの象牙細管を通じて歯髄に伝わりやすくなり、象牙質知覚過敏症が発症すると考えられています。図2参照。

象牙質が口腔内に露出してくるのは、経年的変化が要因となる可能性が高いため、中高年の方に象牙質知覚過敏症の発症例が多いのが現状です。

さて、このようにして発症した象牙質知覚過敏症ですが、その治療法としては、開口した象牙細管を封鎖して、刺激が歯髄へと伝わるのを遮断す

細管通じて歯髄に刺激

重症化前に医師に相談を

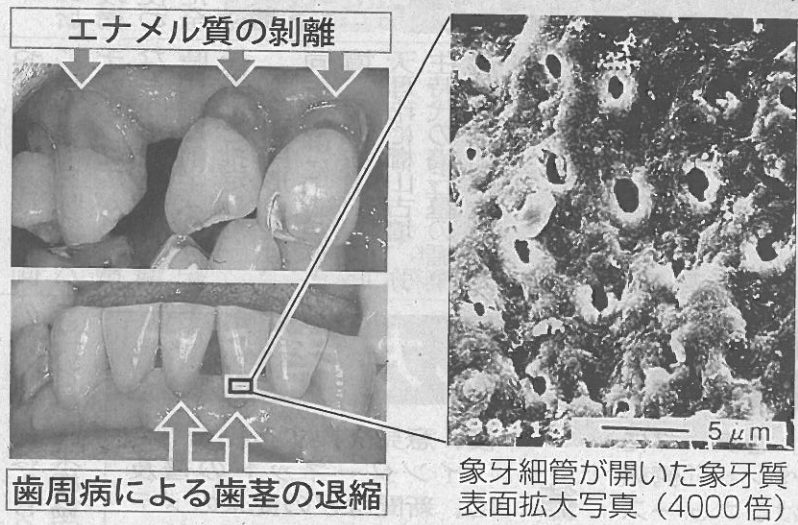


ることが有効だとされています。

そのため、歯科医院では、薬剤塗布や歯科材料による被覆、あるいはレーザー処置などにより、象牙細管を封鎖する治療を主に行っております。

一方、自宅でのセルフケア

(第2土曜日に掲載)



【図2】象牙質知覚過敏症が発症した症例

細管通じて歯髄に刺激

アとして、象牙質知覚過敏症用の歯磨き剤の使用が効果があるとの報告もあります。

しかしながら、かみ合わせの影響で象牙質知覚過敏症を発症している場合や、歯を溶かす作用の強い酸性飲料や食べ物嗜好されている場合には、治療しないことがあります。また、一過性の痛みだからと長期間放置した場合、歯髄の炎症が重症化し、歯髄を除去しないといけなくなることもあります。従って、知覚過敏症状に悩まされている方は、重症化してしまっ前に、歯科医に相談されてみてはいかがでしょうか。